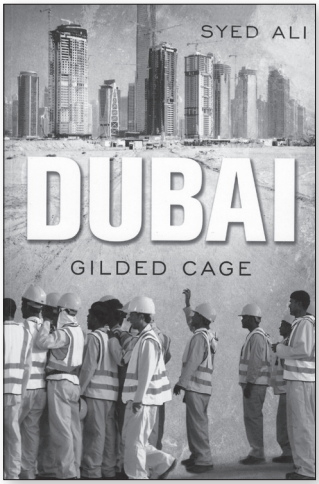
@ book café

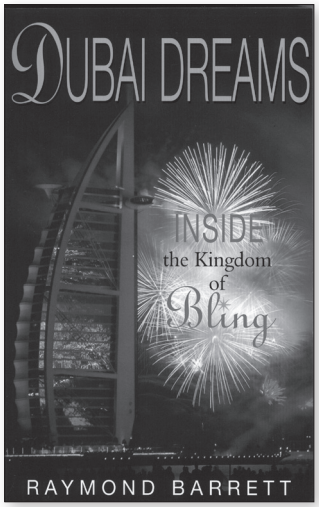
書評〈洋書〉

グローバル都市ドバイが映し出す国際社会の形

選評 東京大学先端科学技術研究センター准教授 **池内 恵**



Syed Ali, *Dubai: Gilded Cage,* Yale University Press, 2010.6,360P



Raymond Barrett, *Dubai Dreams: Inside the Kingdom of Bling,* Nicholas Brealey, 2010.3,240P

ドバイの行く末をどう見るかは、中東の政治経済の帰趨（きすう）を占う際の重要なポイントである。中継貿易と観光、そして旺盛な不動産開発で空前の好景気を演出してきたドバイは、2008年9月末のいわゆる「リーマン・ショック」以来の世界経済の危機により大きな打撃を受けた。ドバイ政府の旗振りのもと行われてきた大胆な開発計画の資金繰りは行き詰まった。2009年11月には、ドバイ政府系持ち株会社ドバイ・ワールドの債務返済繰り延べが発表されたことをきっかけに、世界同時で株式相場が下落する「ドバイ・ショッ

ク」を引き起こした。

日本では、一時には、ドバイ政府の巧みなＰＲ戦略にあまりにもナイーブにはまった、表層的なドバイ紹介に走るマスメディアも多かった。逆に「ドバイが危機だ」となると、あたかもドバイが今すぐにも砂漠のゴーストタウンと化すかのような報道も見かけるようになった。いずれも、ドバイという現象を適切にとらえるにはふさわしくない視点である。これは英語圏の著作にもある程度見られる問題である。ジム・クレイン『黄金の都市――ドバイと資本主義の夢』(Jim Krane, *City of Gold: Dubai and the Dream of Capitalism*, London, St. Martin's Press, 2009) などは、広報情報をうのみにして手放しに礼賛する叙述が多く見られる中で、それとは一貫しない否定的な言及が唐突に挿入される。経済危機前に書いた部分と、その後に加えた部分なのだろうか。

ドバイ・ブームの頂点の時点で、ドバイの統治体制と経済基盤の利点と問題点をバランスよく指摘していたのが、クリストファー・デイヴィッドソン『ドバイ――成功の脆弱性』(Christopher M. Davidson, *Dubai : The Vulnerability of Success*, New York, Columbia University Press, 2008) であるが、その大枠を踏まえた上で、ドバイの社会経済の現実をより具体的に把握するには、最近出版された2冊のエスノグラフィー(民族誌)が大いに参考になる。セイド・アリー『ドバイ――金ぴかの檻』(以下『金ぴかの檻』) は社会学・人類学のグローバル都市論の視点から、ドバイを鮮やかに切り取ったものである。レイモンド・バーレット『ドバイの夢――派手な王国のただ中から』(以下『ドバイの夢』) は地をはう踏査によって、ドバイを構成する人間集団の諸特性・階層から、各街区の特色まで、さらに焦点を絞って記述する。

『金ぴかの檻』はドバイをグローバル都市論の顕著な題材として取り上げる。アリーは四つの切り口からドバイ社会を分析する。第一の切り口は「消費社会」としてのドバイの成り立ちである。ドバイ国民、出稼ぎ労働者、観光客、不動産所有者が、それぞれどのような消費行動によってドバイという現象を成り立たせているか。また「消費」がどのように

してそれらのドバイの各階層を引き寄せているか。

第二は、「ブランド」としてのドバイという切り口である。ドバイ政府によるインフラ開発や投資戦略、そしてメディア統制を含む広報戦略から、著者は「ドバイ・ブランド」の成立の原因を探る。

第三の切り口が、ドバイを動かすのに不可欠の要素「出稼ぎ労働者」である。ドバイ政府による法制度と社会政策が、どのように出稼ぎ労働者の労働条件と生活環境を規定しているか。これを著者は「排除（exclusion）」と「不定着性（impermanence）」をキーワードに分析する。

第四の切り口は、長期居住層、そして市民権を持つ少数者である。ドバイに長期居住し、中にはドバイで生まれ育った専門職階層の多くも、実はドバイの市民権を持っていない。出稼ぎ労働者よりは定着しているものの、彼らもまたドバイにおける「一時性」を強く刻印されており、同化の道は閉ざされている。この「永続的な一時性」に特徴付けられた階層と対比される形で、人数的には圧倒的な少数派であり、唯一「定着性」を備えた「ドバイ市民」の位置を、著者は明らかにする。

『金ぴかの檻』による、グローバル化の社会学の理論を踏まえた切り口は鮮やかで、ドバイという一見つかみ難い現象を概念的に整理するには最適だが、民族・宗教と社会階層の込み入った分布や、関係の複雑な綾やひだを、詳細に読み解く点では『ドバイの夢』が勝っている。『ドバイの夢』は「足で稼いだ」民族誌であり、いわば「高解像度」のドバイ描写である。著者はドバイ政府の宣伝とそれに影響された「ドバイの夢」の皮相さを指摘しつつ、ドバイをそしるだけの議論にも同意しない。一面的なドバイ政府のイメージ戦略とは別に、「ディルハムやディナールで価値を計れない」複数の夢がドバイには集まっているという。

著者はドバイを構成する各階層を、生身の人間集団として書き分けることに成功している。これは『金ぴかの檻』の巧みな概念化と相互補完をなすだろう。

一口に「インド・パキスタンからの出稼ぎ労働者」と言っても、パキスタンのペシャワールと、インド・ケララ州と、バングラデシュから来

る者たちで、全く異なる背景とエスニシティがある。けばけばしいドバイの「富」にしても、「胴元」のマクトゥーム家（ドバイ首長家）が競馬に注ぎ込む豪奢な浪費と、大英帝国の往時から比べてかなり「品下がった」感のある英国人「エクスパット」（長期海外生活者）たちの退廃した浪費とでは、また趣が異なる。ドバイ市民8万人に対して、英国人のエクスパットは10万人を超すという。

極度に恵まれていると共に、社会経済活動で前面に出ることの少ないドバイ人の間にも、新たな文化の息吹が感じられる。著者が取り上げるのは、ドバイ家庭の「ハーレム」（女性の領域）を舞台にして大ヒットしたコミック・アニメ『フリージ』の作者である。

著者はドバイをニュアンスと屈折を交えて描き出す。例えば、出稼ぎ労働者が多数を占めるドバイ社会の特異性を指摘しつつ、古来からペルシャ湾岸とインド洋の交易路に位置し、アラブとペルシャ・インドの圏域が交錯してきたことが、ドバイの長期的に持続する性質と見る。ウィルフレッド・セシジャー（Wilfred Thesiger）などの、20世紀前半に大英帝国の勢力圏を旅した旅行家の著作に時折言及することで、短期的になりがちなドバイ論に歴史の奥行きを与えている。

また、『ドバイの夢』はドバイを単にグローバル都市として一くくりにもしない。ニューヨークやロンドンといった欧米のグローバル都市が普遍的、単一的なルールから成り立ち、そのルールを世界に発信しているのに対し、ドバイは「ソマリアの軍閥のルールとロンドン証券取引所のルール」を混在させているところにこそ特色があるというのは卓見だろう。

共に洗練度の高い両書に、足りないところを挙げるならば、日増しに顕著な中国の存在感についての言及が不十分であるところだろう。ドバイは元来が大英帝国の保護下や米国の勢力圏にあり、英語圏の学者・ジャーナリストの独壇場であった。しかし中国経済の活動拠点としてのドバイの位置付けは、言語や文化の壁があり、十分に検討されてきていない。ここに日本からの視点が介在できる余地がありそうだ。

（いけうち さとし）